

清水ヶ丘の風

ハルモニーコール楽事通信第28号

2017年3月18日

§ シリーズ・マタイ受難曲と私 § 第3回 マタイ受難曲との出会い

テノール 新井治男

今から41年前の1976年の3月21、22の両日、その2年前に誕生した二つの合唱団「ポリフォニカ・アンブロジーナ」と「ポリフォニカ・グレゴリアーナ」が、第3回演奏会として浜松と豊橋でバッハの「マタイ受難曲」を上演しました。偶然でしたが、1973年のバッハの誕生日に指揮者の故濱田徳昭氏の紹介で出会った河野周平(浜松)、若林学(豊橋)、新井(磐田)の3名が意気投合して、1年間の準備の後立ち上げた合唱団です。学生を含む20代の若者を中心とする、二つ合わせても30数人に過ぎぬメンバーからなる団体が、発足2年後に「マタイ」を演奏するなど、今考えれば無謀のそしりを免れませんが、それにはいくつかの事情がありました。

濱田徳昭氏はその当時全国にバッハ・ヘンデル・モーツァルトの宗教音楽を演奏する合唱団を10団体余り音楽監督として指揮していました。やがてこれらの団体は「日本オラトリオ連盟」の名称で合同の演奏会を開催するようになります。1979年にNHKホールで行われた「マタイ」は、20世紀最高のエヴァンゲリスト歌手と言われ、現在もその歌唱が一つの規範となっているエルンスト・ヘフリガー氏を招き、客席には皇太子(現天皇)ご一家が臨席するという、豪華なお膳立ての演奏会で、その録音は日曜朝のNHK-FMで3週にわたって放送されました。ここに至る過程で、各合唱団は自主公演で一度は「マタイ」を歌っておかねばならない、と言うのが濱田氏の考えでした。その流れに誕生間もない私たちも否応なく乗ったと、言うのが正直な所でした。濱田氏の出した課題は厳しいもので、全曲を暗譜で歌うこと、イエスとピラトを除く登場人物はすべて合唱団員が(無論暗譜で)歌うこと、演奏会は2日続きとすること、エヴァンゲリスト・イエス役の歌手は指揮者が決定すること、器楽の主要な演奏者も同様とすること、フル編成の試演会を行うこと等々、過酷な条件ではありましたが私たちはそれを受け入れ、龍吟社版(濱田徳昭編)の楽譜で練習に入りました。

合唱そのものの技術は、72年に同じ指揮者の許、東京で歌った「ロ短調ミサ曲」に比べて容易に感じましたが、ご承知のように自由詩やコラールの合唱以外の聖句を歌う部分では、エヴァンゲリストの朗唱からアタッカで入る合唱が多く、そのタイミングとテンポに慣れるまでが一苦勞でした。そこで指揮者は合唱の中から練習用のエヴァンゲリスト役を出すよう求め、それが私に回ってきたのです。

大変なことになりました。それまでドイツ語には興味があったものの、就職した年の1年間NHKラジオの初級ドイツ語講座を聴いただけですから、とてもそれらしい発音はできません。しかしそこに救い主が現れました。豊橋のグループで伴奏ピアニストをしていたイギリス人、ランダル・マクドネル氏がドイツ語の発音とエヴァンゲリストの歌い方を教えて下さるというのです。マクドネル氏はケンブリッジ・クレアカレッジの出身で、当時愛知大学で英文学を教えていましたが、この方の趣味は「ヘンデルの和声を研究すること」で、後に彼の作った「メサイア」の数字付き通奏低音のリアリゼーションが濱田氏の目にとまり、日本オラトリオ連盟の公式バージョンとなったほどでした。私は何回かマクドネル氏のお宅に伺い、懇切なレッスンを受けました。

更に私には本番で歌うペテロの役も与えられ、自分の持ち声ではないバリトンの声域に苦勞しながら、必死で”Wenn sie auch alle sich an dir ärgerten, so will ich doch mich nimmermehr ärgern”(第16曲)に始まり、やがてイエスを三度否む(第38曲)までの言葉を暗譜で歌い切る練習しました。

浜松・豊橋で週2回の練習、豊川のお寺での合宿、連盟の一員である東京都民合唱団の「マタイ」公演の応援、浜松カトリック教会での試演会を経て本番間近となった頃、それまでの演奏会とは比べものにならない大型の予算をまかなう資金の不足が明らかになりました。計画では東京・神戸・京都から招く指揮者、ソリスト、器楽奏者には出演料と交通費の他、宿泊費も差し上げねばなりません。ちなみにエヴァンゲリストは当時「ハイd」を使えるテノールとして関西で売り出し中の西垣俊朗氏、オルガンは志村拓生氏、チェロは翌年日本音楽コンクールで優勝する上村昇氏といったそうそうたる顔ぶれ、イエスは浜松出身で当時東京芸大の院生だった渡部成哉氏といった一流の歌手陣で、志村氏にはゲネラルプロベで団内ソリストのレッスンをさせていただきました。またソプラノ・リピエーノは、バスの平野満彦氏が指導する静岡県立磐田北高校合唱部にお願いしました。

楽器や録音については河野氏の勤務先である日本楽器(現ヤマハ)が協力してくれましたが、これだけ演奏者に贅を尽くせば赤字は必至。そんな状況下、豊橋のメンバーだった女子大生二人は、駅頭でビラまきをしてチケットを売ったそうです。私も職場や地域の合唱団、教会、飲食店、地元の有力者を歴訪するなど、全員本番直前まで宣伝に努めましたが力及ばず、悲観的な予想を覆すことはできませんでした。

さて豊橋での演奏会当日ステージリハの間、合唱のメンバーに小さな紙片が回され、そこに「今日はバツハの誕生日です」と書かれてありました。それを知って皆のモチベーションは大いに上がったのです。

演奏は暗譜のおかげか、指揮者の力量によるものか、器楽アンサンブル・ソリスト・リピエーノの協力によるものか、集中度の高い内容で、「Wenn ich einmal soll scheiden」(第62曲)のコラールが歌われた時は、ハンカチで目頭を押さえるお客様の顔も見えました。

こうして2日間の連続演奏を終えた合唱のメンバーは皆、大きな充足感と、何か大変なことをしてしまったらしいという意識と、深い疲労感に包まれていました。しかしこの時点ではまだ「マタイ受難曲」の持つ底知れぬ奥深さには気づいていなかったのかも知れません。そのことはその後何度も演奏を繰り返す内、徐々に判ってきたことです。その当時は「群盲像をなでる」体の「怖いもの知らず」の私たちだったのでしょう。

しかし厳しい現実、大きな赤字を目の前に突きつけます。そのせいでただでさえ脆弱な合唱団の財政基盤は大きな痛手を受け、やがて7年後解散の止むなきに至ることとなったのです。

その後このことが私を経済的にも心理的にも苦しみ、「果たしてあの時点で『マタイ』を上演したことは、正しい選択だったのか」という問いが、しばらくの間頭を離れませんでした。更に悪いのは、その後この曲を歌うにつけ聴くにつけ、絶えず辛く苦しい思い出がよみがえって、音楽への集中を妨げられてしまったことです。それはあのライブツイヒ聖トーマス教会聖歌隊の1990年来日公演で、ペーター・シュライヤーのエヴァンゲリストを会場で聴いているときにも不意に現れ、私を悩ませたのでした。最上の演奏を前にしてなんと言うことだろう、私の頭から「マタイ」に付着した夾雑物・不純物を取り除くにはどうすれば良いのか、私はその都度自問を繰り返しました。

その答えはついに見つかりませんでした。2012年3月に第31代カントール、ゲオルク・クリストフ・ビラー氏に率いられたトマナコアが、サントリーホールで上演した「マタイ受難曲」を聴いていた私の頭からは、いつの間にかすべての雑念が消え去っていました。その原因は今もってわかりません(ちなみにこの時の日本公演は、前年に発生した東日本大震災により、放射能漏れを起こした福島第一原発の影響を恐れて、子供たちの訪日に反対した少年合唱団員の父母を、ビラー氏が懸命に説得して実現したそうです)。

今、ハルモニーコールで「マタイ受難曲」を練習している私の心を覆う影はありません。安藤先生の宗教家らしいテキストの解釈が抵抗なく胸に落ち、自分の歌にも良い影響をいただいているような気がします。

来年の「マタイ」が良い演奏になりそうな予感がしてなりません。

【後記】 昨年10月7日以来、身辺を取り巻く慌ただしさに巻き込まれて、5ヶ月の長きにわたって休筆をしてしまった(私担当の)楽事通信でしたが、今日からまた執筆を再開することになりました。本論は次回以降とし、とりあえずシリーズ「マタイ受難曲と私」の第3回として28号をお届け致します。 (大震災から6年目の3月11日に 新井)